

後期：現代聖書学の諸問題

オリエンテーション

- | | |
|----------------------------|-------|
| 1. 創造論 | |
| 2. 一神教 | |
| 3. 契約思想 | |
| 4. 神殿神学・知恵文学 | |
| 5. 預言 | |
| 6. 研究発表：侯 | 11/16 |
| 7. 研究発表：張 | 11/30 |
| 8. 研究発表：齋藤 or 南 | 12/7 |
| 9. 研究発表：齋藤 or 南 | 12/14 |
| 10. 研究発表：金、岡田 | 12/21 |
| 11. 研究発表：山下 | 1/4 |
| 12. 終末論・史的イエス | 1/11 |
| 13. イエスの譬え | 1/18 |
| 14. 初期キリスト教と女性 | 1/25 |
| 15. パウロと政治神学 → 火曜日の「聖書演習」へ | |

<前回>神殿神学・知恵文学**(1) 統一王国とその意義**

1. 統一王国の意義
 - 外敵（ペリシテ人は職業軍人の重装歩兵を有していた）への軍事的対抗、政治的安定
 - ・領土拡張、経済と文化の繁栄
2. 王権成立の経緯
3. 調停者としての王
 - cf. 古代オリエントの王権イデオロギー：絶対権力者としての王
 - 地上における神の代理、神の子、あるいは神的な存在 → 近代の王権神授説
4. 王自身が一人の人間であり、罪人である。
 - ダビデの罪（ウリヤの妻バト・シェバを奪い妻とした）と預言者ナタンによる糾弾
5. 文化の繁栄、文化活動の場としての宮廷
 - ・ヘブライ文字の成立（ダビデ王時代との説もある。
 - ↓ <http://www.christiantoday.co.jp/main/theology-news-467.html>)
 - 文学活動の開始：「ダビデ台頭史」（サムエル上 16 章～下 5 章）、「ダビデ王位継承史」（サムエル下 9 章～列王記上 2 章）、あるいは族長物語。
 - ・音楽：楽器（豎琴）の名手ダビデ
 - ・学問の発展（書記学校の成立）→ 知恵文学・知恵思想、知者ソロモン
6. 経済の繁栄 → 古代イスラエルの絶頂（過去の理想化）
 - 「栄華を極めたソロモン」（マタイ 6.29、ルカ 12.27）
 - ・貿易が富をもたらす → 財宝伝説

南アラビアのシェバ（シバ）の女王がソロモンを訪問、栄華と知恵に驚嘆

8. 多民族国家イスラエル（←領土拡張）と民衆への重税・強制労働

（2）王国期の宗教と神殿神学

10. 部族連合イスラエルからイスラエル王国（ダビデ＝ソロモン王朝）へ
部族連合と反王権主義の伝統への大きな変更
11. 王国形成は宗教の統合でもあった
 - ・ 地方聖所からエルサレムの神殿
 - ・ 神殿を中心とする宗教秩序
 - ・ 王権の正当化 → 政治神学の成立
12. 神殿とは何か。
 - ・ 天と地の接点、宇宙の中心、神の臨在する場所：ヒエロファニーとコスモスの生成
 - ・ 儀礼の場→政治と生活の中心
 - 儀礼：犠牲を捧げる、王の即位 祭り：
 - ・ 偶像禁止

（3）王国と知恵文学

1. 旧約聖書の「知恵文学」：ヨブ記、詩篇の一部、箴言、コヘレトの言葉
外典の知恵の書、シラ書（集会の書）
2. 創造や契約をめぐる諸思想を前提として、それを古代イスラエル民族が置かれた歴史的状況（王国形成・崩壊からバビロン捕囚、地中海・オリエント世界そしてヘレニズム世界の国際関係）において展開したものと位置付けられる。
3. 知恵文学の成立の場：フォン・ラートの旧約聖書研究→宮廷知識人、とくにエジプトの書記学校に相当する官吏養成 学校の知識人
 - (1) 共同体の知恵（伝承） (2) 対外的な国際関係が要求する国際的な知恵
4. 共同体の知恵：共同体の一員として習得すべき知恵（＝慣習的知恵）
因果応報原理の中心的な役割。
箴言1章8節「わが子よ、父の諭しに聞き従え。母の教えをおろそかにするな。」

（4）ヘブライ的知恵文学の思想的特徴

①創造の知恵、あるいは知恵による創造

世界に内在する法則性への信頼→神への信頼＝「神への畏れ」

知恵思想は創造論を前提とし、それを展開する内容をもっている。この点は、下に引用した箴言8章において、神が天地創造に先だって、最初に「知恵」を創造した。

②神の創造行為の探求と称賛としての科学 → 自然を通じた神の讚美

→ 自然神学（書物としての自然）

③「知恵のある生活」

日常的な実践に関わる知恵に中心が置かれている。箴言14章などに見られる一連の対照（「神を畏れる一神に逆らう」→「知恵一無知」、「正しい一悪しき」、「謙虚一高慢」）からもわかるように、知恵は共同体において正しく・賢明に生きることを可能にする実践的知恵、世代から世代へと伝承された知恵。共同体の知恵は共同体の集団的な自己同一性の核心に属している。

④因果応報とその限界。個人の問題として、そして共同体・民族の問題として。

この因果応報の様々な破れを鋭く描き、因果応報の限界をはっきり見据えている。
 「コヘレトの言葉」（「なんという空しさ、なんという空しさ、すべては空しい」）
 「ヨブ記」は、正しく生きる人間（義人）が不幸になる、という問題（義人の苦難）

（5）ヨブ記

5. 人生の謎（悪・罪・不幸・不条理・無意味・不正義）に対して、宗教は何を語るのか。
 謎に直面するとき、宗教の真価が問われる。
6. ヨブ記をどのように読むか。
 - ・散文体での枠組みの位置づけの問題
 - ・文学作品としてのヨブ記 → 思想にとって文学とは何か。
7. 明確な論点とわかれる論点
 - ・因果応報の破綻の後の世界
 - ・ヨブは納得・了解したのか、救われたのか。
8. ユングのヨブ解釈
 「神の変容」のプロセスにおけるヨブ記の意義。
 - ・ヨブの道徳的な優位
 - ・非合理的で暴虐な神から合理性を有する神（神の人間化）へ
 悪の問題への対処

5. 預言

（1）王国分裂とその原因

1. ダビデ＝ソロモン王朝の分裂（BC.922 年）
 北イスラエル王国（922-721）、南ユダ王国（922-587）
2. 内的要因
 王制の問題点、諸部族の利害の調停困難（北の諸部族の不満）
 外的要因
 国際政治、軍事大国・巨大帝国（アッシリアとエジプト）の狭間

（2）預言者とその思想的課題

3. 祭司、預言者、知者
 「神の啓示を受け、神の名によって語る人」「預言のカリスマ」
 神の言葉 → 預言者（言葉を預かる） → 王、民衆
 「政治的狀況で発言を行う扇動政治家・政治評論家」
4. 先見者（ホーゼー）、見者（ローエー） cf. 恍惚預言者群
 預言者（ナービー）
 古典記以前の預言者：サムエル、ナタン、エリヤ、エリシャ
 記述預言者
 三大預言者：イザヤ（第一、二、三）、エレミヤ、エザキエル
 小12預言者：ホセア、ヨエル、アモス、オバデヤ、ヨナ、ミカ、ナホム、
 ハバクク、ゼファニア、ハガイ、ゼカリヤ、マラキ
5. 民族の危機＝契約思想に基づく古代イスラエル宗教の危機

契約思想：神（主・ヤハウェ）とイスラエルの契約

子孫繁栄と土地取得の約束、信頼

→ 約束成就のプロセスとしての歴史

歴史の現実＝国家・民族滅亡の危機（バビロン捕囚、神殿崩壊）

↓

預言者はこの危機に直面して、古代イスラエル宗教の再生という課題に取り組んだ。

歴史意識の転換（契約思想の危機を乗り越える歴史の再解釈）

イスラエル民族の歴史的危機（バビロン捕囚）→預言者による歴史の再解釈（契約違反＝罪と、罰としての滅亡）→イスラエル民族宗教の変革

↓

民族神から、諸民族の神へ（正義の神）。排他的一神教、メシア待望。

6. 滅亡預言：契約を破ったイスラエル（罪）への罰としての危機

<アモス 3>

13 万軍の神、主なる神は言われる。聞け、ヤコブの家に警告せよ。14 わたしがイスラエルの罪を罰する日に、ベテルの祭壇に罰を下す。祭壇の角は切られて地に落ちる。15 わたしは冬の家と夏の家を打ち壊す。象牙の家は滅び、大邸宅も消えうせると、主は言われる。

<イザヤ 2>

1 アモツの子イザヤが、ユダとエルサレムについて見た幻。これはユダの王、ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの治世のことである。2 天よ聞け、地よ耳を傾けよ、主が語られる。わたしは子らを育てて大きくした。しかし、彼らはわたしに背いた。3 牛は飼い主を知り、ろばは主人の飼い葉桶を知っている。しかし、イスラエルは知らず、わたしの民は見分けない。4 災いだ、罪を犯す国、咎の重い民、悪を行う者の子孫、墮落した子らは。彼らは主を捨て、イスラエルの聖なる方を侮り、背を向けた。5 何故、お前たちは背きを重ね、なおも打たれようとするのか、頭は病み、心臓は衰えているのに。

7. 救済預言：救済の約束、契約の更新＝新しい契約 → キリスト教では、イエス・キリストをこの預言の成就と解釈する。新約＝新しい契約

<イザヤ 42>

1 見よ、わたしの僕、わたしが支える者を。わたしが選び、喜び迎える者を。彼の上にわたしの霊は置かれ、彼は国々の裁きを導き出す。2 彼は叫ばず、呼ばわらず、声を巷に響かせない。3 傷ついた葦を折ることなく、暗くなってゆく灯心を消すことなく、裁きを導き出して、確かなものとする。4 暗くなることも、傷つき果てることもない、この地に裁きを置くときまでは。島々は彼の教えを待ち望む。5 主である神はこう言われる。神は天を創造して、これを広げ、地とそこに生ずるものを繰り広げ、その上に住む人々に息を与え、そこを歩く者に霊を与えられる。6 主であるわたしは、恵みをもってあなたを呼びあなたの手を取った。民の契約、諸国の光として、あなたを形づくり、あなたを立てた。7 見ることのできない目を開き、捕らわれ人をその枷から、闇に住む人をその牢獄から救い出すために。

<イザヤ 49>

5 主の御目にわたしは重んじられている。わたしの神こそ、わたしの力。今や、主は言われる。ヤコブを御もとに立ち帰らせ、イスラエルを集めるために、母の胎にあったわたしを、御自分の僕として形づくられた主は 6 こう言われる。わたしはあなたを僕として、ヤコブの諸部族を立ち上がらせ、イスラエルの残りの者を連れ帰らせる。だがそれにもまして、わたしはあなたを国々の光とし、わたしの救いを地の果てまで、もたらず者とする。

<エレミヤ 31 >

31 見よ、わたしがイスラエルの家、ユダの家と新しい契約を結ぶ日が来る、と主は言われる。32 この契約は、かつてわたしが彼らの先祖の手を取ってエジプトの地から導き出したときに結んだものではない。わたしが彼らの主人であったにもかかわらず、彼らはこの契約を破った、と主は言われる。33 しかし、来るべき日に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこれである、と主は言われる。すなわち、わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。34 そのとき、人々は隣人どうし、兄弟どうし、「主を知れ」と言って教えることはない。彼らはすべて、小さい者も大きい者もわたしを知るからである、と主は言われる。わたしは彼らの悪を赦し、再び彼らの罪に心を留めることはない。

(3) 預言者の思想

8. 社会正義：正義の神、不正・悪が滅亡の原因となる。

<アモス 2 >

6 主はこう言われる。イスラエルの三つの罪、四つの罪のゆえに、わたしは決して赦さない。彼らが正しい者を金で、貧しい者を靴一足の値で売ったからだ。7 彼らは弱い者の頭を地の塵に踏みつけ、悩む者の道を曲げている。父も子も同じ女のもとに通い、わたしの聖なる名を汚している。8 祭壇のあるところではどこでも、その傍らに質にとった衣を広げ、科料として取り立てたぶどう酒を、神殿の中で飲んでいる。

9. 排他的民族主義の克服

古代イスラエルの宗教＝民族宗教、選民思想

旧約聖書預言者における民族主義とその克服

1) 民族の救いとしての歴史・終末

ダビデ王家の再建 → 救世主（メシア）はダビデの子孫から生まれる。

2) 苦難の僕：民族の相対化と新しい使命の自覚

民族の滅亡と神の正義の普遍性

10. 民族宗教から普遍宗教へ（民族宗教自体の内部からそれを乗り越える動きが現れる）

預言者の平和思想、諸民族の神であるヤハウエ、神は他民族を通して意図を実現する。

<イザヤ 2 >

4 主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし／槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばない。5 ヤ

コブの家よ、主の光の中を歩もう。

<イザヤ19>

24 その日には、イスラエルは、エジプトとアッシリアと共に、世界を祝福する第三のものとなるであろう。25 万軍の主は彼らを祝福して言われる。「祝福されよ／わが民エジプト／わが手の業なるアッシリア／わが嗣業なるイスラエル」と。

<イザヤ53>

1 わたしたちの聞いたことを、誰が信じえようか。主は御腕の力を誰に示されたことがあるか。2 乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のように、この人は主の前に育った。見るべき面影はなく、輝かしい風格も、好ましい容姿もない。3 彼は軽蔑され、人々に見捨てられ、多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し、わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。4 彼が担ったのはわたしたちの病、彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに、わたしたちは思っていた、神の手にかかり、打たれたから、彼は苦しんでいるのだと、と。5 彼が刺し貫かれたのは、わたしたちの背きのためであり、彼が打ち砕かれたのは、わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによってわたしたちに平和が与えられ、彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。

11 彼は自らの苦しみの実りを見、それを知って満足する。わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために、彼らの罪を自ら負った。12 それゆえ、わたしは多くの人を彼の取り分とし、彼は戦利品としておびたしい人を受け。彼が自らをなげうち、死んで、罪人のひとりに数えられたからだ。多くの人を過ちを担い、背いた者のために執り成しをしたのは、この人であった。

<参考文献>

1. G. フォン・ラート『旧約聖書神学Ⅰ、Ⅱ』日本キリスト教団出版局。
2. 関根正雄 『古代イスラエルの思想』講談社学術文庫。
3. 関根清三 『旧約聖書の思想 24の断章』岩波書店。
4. 浅野順一 『預言者の研究』新教新書。
5. 『総説 旧約聖書』日本キリスト教団出版局、「第三章 預言書」(283-382頁)
6. 木田献一「預言書」『聖書講座 第二巻』日本基督教団出版局、1966年。
7. マルティン・ブーバー 『預言者の信仰』みすず書房。
8. マックス・ウェーバー 『古代ユダヤ教』みすず書房。